

【大阪大学医学部附属病院の概要】

病院名:大阪大学医学部附属病院

The University of Osaka Hospital

所在地:〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-15

電話:06-6879-5111(代表)

病床数:1086床(一般:1034床、精神:52床、臨床研究フェーズ I :10床)



<病院の特徴>

大阪大学医学部附属病院の源流は、1869（明治2）年に大阪府が開設した仮病院・医学校に遡る。1931（昭和6）年に大阪帝国大学設立、1947（昭和22）年に新制大阪大学への移行に伴い、大阪大学医学部附属病院となった。1993（平成5）年に中之島キャンパスから吹田キャンパスに移転し、その後、特定機能病院に承認され、現在に至っている。

当院は、「良質な医療を提供すると共に、医療人の育成と医療の発展に貢献」を掲げ、患者本位の安心・安全な医療、高度先進医療の実践、地域医療への貢献、そして豊かな人間性を備えた医療人の育成を基本方針としている。がん医療、循環器医療、再生医療、移植医療をはじめ幅広い領域において高度医療を提供するとともに、新規医療技術や医薬品の開発を担う研究や教育にも注力し、臨床研究中核病院、がんゲノム医療中核拠点病院を担うとともに、内閣府主導のAIホスピタル事業にも参画し、医療AIの実装化にも取り組んでいる。

2025（令和7）年5月に開院した統合診療棟は、外来・中央診療施設・病棟機能を併せ持ち、高機能な手術室や低侵襲施設、総合周産期母子医療センター、アイセンタ

一、患者包括サポートセンターなどの機能強化部門の整備を行うことで、より質の高い医療提供と未来医療の創造をめざしている。

2024（令和6）年度実績

診療科数：32科

職員数：2,950名（医師745名、看護師1,129名、医療技術職員427名、教員304名、事務職員345名）

外来患者数：1日平均2,325名

入院患者数：1日平均893名

病床稼働率：83.0%

平均在院日数：13.1日

年間手術件数：12,859件（眼科4,238件を含む）

院内がん登録件数：3,741件（2023年診断分）

移植件数：臓器移植82件（保険承認された全臓器）

造血幹細胞移植25件

ドクターヘリ出動件数：145件

院外処方箋発行率：98.3%

薬剤管理指導算定件数：31,452件

<薬剤部運営の特徴>

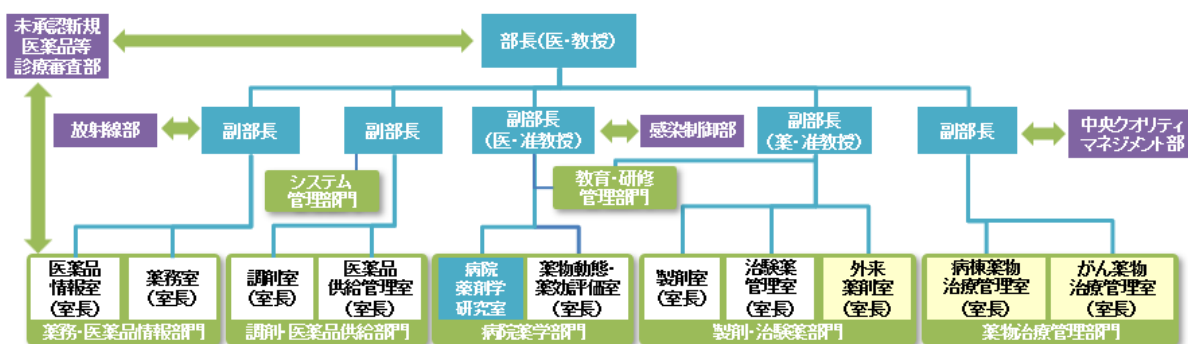
薬剤部では、病院機能を担う薬剤部門として、1) 新しい業務の構築・実践、2) 人材育成、3) エビデンスの構築・発信を理念として掲げている。業務面では、全ての病棟に薬剤師を配置し、チーム医療の一員として薬物療法の安全・安心かつ効率的な提供を進めてきた。教育面では医学科生に対する医薬品適正使用のマインド醸成、阪大薬学部生の教育への協力、病院実務実習生の受け入れを通じて、問題解決能力を備えた薬剤師の育成を図ってきた。また、2021年度から薬剤師レジデント制度を立ち上げ、大学病院の充実した教育リソースを活用することで、薬剤師をリードする優れた人材の育成を図っている。さらに、日本医療薬学会や日本病院薬剤師会の専門薬剤師制度の研修施設にも認定されており、がんや感染領域等の領域に高い専門性を有する薬剤師の育成も推進している。

1. 薬剤部の組織体制

- ・薬剤師：102枠（教員3枠、常勤薬剤師87枠、薬剤師レジデント12枠）

・事務系職員：11 枠

合計 113 枠



薬剤部は5部門・10室から構成され、5人の副部長が各部門を統括している。各部門および各室は、相互に連携しながら業務を遂行し、効率的で質の高い薬剤業務の実現を図っている。薬剤部に研究室を置き、研究に前向きな薬剤部職員のほか、薬学部生や大学院生（医学系研究科・薬学研究科）等に対する研究指導を行っており、薬物療法や薬物治療管理に関連するエビデンス構築を通して、社会貢献と問題解決能力を備えた人材育成を図っている。

2. 教育・研修体制の充実

当院における薬剤師の卒後初期研修は約100年の歴史が有するが、研修内容の高度化に対応するため、病院独自の薬剤師レジデント制度を立ち上げ、2021年度から受入を開始した。薬剤師レジデント制度は2年間のプログラムから構成され、1年次には、主に調剤や注射薬調製、抗がん薬調製、無菌製剤など臨床薬剤師に必要な基礎的業務を学び、2年次には担当病棟を持ち病棟薬剤業務や領域別チーム医療に参画することで、個別薬物療法に関する実践力と応用力を高める。薬剤師レジデントは、勉強会・症例検討会を含む部内セミナーに定期的に参加し専門知識を深めるとともに、CQセミナーを担当することで、情報検索やテーマ設定を自ら実践し、問題解決能力を養う。成果を学会発表等につなげることで、臨床と学術の両面から薬剤師としての視野拡大を図っている。薬剤師レジデントは修了後、当院のみならず関西地区や他地区の病院・薬局等に就職している。

2025年4月から、当院の薬剤師1名が大阪府下の薬剤師少数地域に所在する民間病院へ出向し、研修を実施している（薬剤業務向上加算に対応）。この出向研修により、出向先施設の業務向上や当院への研修成果の還元だけでなく、研修薬剤師のスキルアップが期待される。

3. 薬剤業務の質向上への取り組み

薬剤部では、全ての一般病棟と手術部に専任薬剤師を配置し、病棟薬剤業務を実施している（病棟薬剤業務実施加算に対応）。病棟専任薬剤師は、持参薬管理や治療計画（レジメン）管理、薬品管理を中心に薬物療法の有効性・安全性向上に取り組むほか、総合周産期母子医療センターでは抗がん薬以外の注射薬の混合調製にも関わっている。なお、総合周産期母子医療センター以外で使用される中心静脈栄養（TPN）については、医師からのオーダー情報に基づき薬剤部製剤室で一元的に調製している。各病棟担当の薬剤師は各科のカンファレンスや回診に積極的に参加し、治療への助言や情報共有を行うことで、医療の質向上に寄与している。

4. がん薬物療法体制の強化

外来がん薬物療法の質と安全性確保を目的として、がん患者への指導、地域薬局との情報共有、研修会の開催等を実施している（外来化学療法加算の連携充実加算に対応）。また、2016年1月よりがん薬剤師外来を設け、患者相談への応需や診察前面談の実施による薬学的管理指導の強化と医師の労務負担軽減にも寄与している（がん薬物療法体制充実加算にも対応）。また、原則として全てのがん化学療法レジメンを審査・登録することで、安全で質の高いがん薬物療法を支えている。

5. 入院前支援による持参薬確認の取り組み

手術予定患者の術前中止薬の確実な中止や入院前から継続する薬物療法を適切に実施するため、入院前支援における薬歴確認を強化している。院内対応患者の場合は、当院の外来担当薬剤師が対応するほか、一部の患者は地域薬局とも連携し、薬局薬剤師から事前に服薬情報等を提供（調剤報酬の服薬情報等提供料3に対応）していただくことで、入退院時も薬物治療管理を切れ目なく継続する試みも進めている。

6. 地域薬学連携における医療 DX の取り組み

阪大病院ネットでは、ID-Link の仕組みを利用することで、地域薬局から阪大病院の電子カルテ情報を閲覧出来る仕組みを2021年12月から提供している。また、2025年6月から電子処方箋の運用も開始した。

地域薬局から薬剤部に FAX 送信される服薬情報等提供書等は用途別・目的別に様式が定められ、その種類や受領件数は年々増加している。電子カルテへの転記に伴う問題や FAX 送信トラブルへの対策として、2025年4月から電子トレーシングレポートシステム（AAde-Report）を導入した。本システムには、薬剤部と地域薬局間で患者情

報を含む文書を安全かつ簡便に作成し共有する機能に加え、チャット機能が備わっている。導入の結果、本システムに対応した地域薬局との間では紙運用が皆無になり、送信トラブルや転記負担も大幅に減少した。今後、本システムの地域における導入が進み標準環境となることで、地域薬学管理のさらなる高度化及び効率化に寄与することが期待されている。

<見 学 時 間>

14時～16時

<受入れ予定人数>

15名程度

<見学者の集合場所>

外来・中診棟 L階 薬剤部⑫窓口前

<交 通 機 関>

- ・大阪モノレール『阪大病院前』下車
- ・JR 茨木駅から近鉄バス[阪大本部前行き]で『阪大医学部病院前』下車
- ・阪急茨木市駅から近鉄バス[阪大本部前行き]で『阪大医学部病院前』下車
- ・北大阪急行千里中央駅から阪急バス[阪大本部前行き]で『阪大医学部病院前』下車

<案 内 図>

※薬剤部⑫窓口：入退院玄関より入り、L階へ降りてください。

